

## 第4章：愛によって働くイエス様への信仰

前章で、クリスチャンの生き方は、ヨハネの第一の手紙第3章23節の一文に要約されるということを見してきました。「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです」。このことを悟るとき、肩の重荷が落ちていくような感覚を味わいます。神の掟は耐え難いものではなく、担うのに軽く、そして良きものと安らぎに満ちているのです（マタイによる福音書第11章28節から30節、ヨハネの第一の手紙第5章3節）。イエス・キリストの信者の方々がこれを知れば、救い主であるお方への実を結ぶ生き方がはっきりと見えてくるはずですが。

すでに明確にしてきましたが、すべての愛の実は、イエス様がわたしたちの内に働かれるとき、イエス・キリストへの信仰により生まれ出ます。ガラテヤ人への手紙第5章6節に、「キリスト・イエスにあっては、割礼があってもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によって働く信仰だけである」とあります。新約聖書では、割礼を受けることは、モーセの律法の下に身が置かれている象徴だとされています。ですが、このガラテヤ人への手紙によると、使徒パウロは割礼を受けることは無意味だと言っているのです。「割礼があってもなくても、問題ではない」と。つまり、モーセの律法を守ろうとする努めは、何の益にもならないのです。同様に、割礼を受けなくても、何の益にもなりません。「割礼があってもなくても、問題ではない」のです。ですから、律法なしに自由に生きるシステムを重視することも無意味なのです。では、これは一体どういうことなのでしょう？イエス・キリストにある真の価値とは、愛によって働くイエス様への信仰のみに認められます。クリスチャンの間で、律法、あるいは恵みのどちらかを重視する傾向をよく目にしてきました。ある人は、神の律法を守る必要を、また、ある人は、恵みにあつて自由に満ちて生きる必要を重視しています。しかし使徒パウロは、ガラテヤ人への手紙で、どちらも問題ではないと言っているのです。神の律法をどれだけ守るかは問題ではありません。イエス様は、愛によって働く信仰のみに価値を見い出されます。同じように、どれだけ恵みの教えを定めようとも、愛によって働く信仰でなければ、それも無意味なのです。

主イエス・キリストにある愛だけが、クリスチャンにとって価値のあるものとなります。前章にも書きましたが、この悟りは、魂に大きな安らぎを与えます。わたしたちの人生に対する、主の御心は何であるのかと、悩み続ける必要がなくなったのです。主の思いはとても単純です。「わたしは新しいおきてをあなた方に与える。わたしがあなた方を愛したように、あなた方が互いを愛することだ。あなた方も互いに愛し合うためだ」（ヨハネによる福音書第13章34節）。そこで、この章では、愛によって働く信仰がイエス・キリストの枝であり多くの実を生み出す、ということを示したいと思います。愛によって働く信仰がクリスチャンの生き方なのです。

この章を進めるにあたり、神を喜ばせるもの、つまりイエス・キリストにある愛と、神を喜ばせないそのほかのすべて、この両者をはっきりと区別させたいと思います。いくつかの鍵となる聖句を見ることで、愛が何よりも優れているということが、皆さまの目に明らかになるよう願っています。

新約聖書の中の、衝撃的な聖句が二つあります。これらの聖句から、宗教的な行い、熱心さ、その成果は、イエス様を喜ばせはしないとお分かりいただきたいのです。

まず、一つ目の聖句、マタイによる福音書第7章21節から23節を見てみましょう。ここでは、イエス様の恐れるべく言葉が見られます。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の王国に入るのではなく、天におられるわたしの父のご意志を行なう者が入るのだ。その日には、多くの者がわたしに向かって、『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名において預言し、あなたの名において悪霊たちを追い出し、あなたの名において多くの強力な業を行なったではありませんか』と言うだろう。その時、わたしは彼らに告げる、『わたしは少しもあなた方を知らない。不法を働く者たちよ、わたしから離れ去れ』と。」これは、とても恐ろしい箇所です。イエス様は「多く」のイエス・キリストの弟子のように生活していた人々が不法を働く者だとされ、離れ去れと言われているのです。これはどういうことでしょうか？ここに出てくる人々はみな、完璧な弟子と見える人ばかりです。彼らは、予言をし、悪霊を追い出し、主の名による多くの素晴らしい業を行ったのです。このような人々を、クリスチャンではないとだれが言えるのでしょうか。彼らの言葉、行いは、人の目には、主の偉大なしもべとして映ったのです。これらの人々は、おそらくリーダー的な存在として高い地位にいたことでしょう。多くの人の指導者であり、彼らを見聞きする人に尊敬されていたはずですが、しかし、主イエス・キリストは彼らをよく知りませんでした。主イエス・キリストにとっては、ただの不法を働く者にすぎなかったのです。

次に、二つ目の聖句は、マタイによる福音書第5章20節です。イエス様は弟子たちに向かってこう語っておられます。「あなた方に告げるが、あなた方の義が律法学者たちやファリサイ人たちのものにまさっていなければ、あなた方は決して天の王国に入ることはないからだ。」(マタイによる福音書第5章20節)律法学者や、ファリサイ派の人たちは、大変な宗教家で、神の律法を守るのに熱心でした。良き行い、神の知識、伝道活動、そのほか多くの宗教的な儀式に熱心に従っていました。自分たちの目に真実であることを追い求め、義人として生きる最善の努力をしていました。彼らは自分たちの目に、また、多くの一般大衆の目に、神の完璧なしもべと見えたでしょう。しかし、イエス様は、彼らを偽善者だと言明し、わたしたちの義が、彼らの義にまさっていなければ、天の王国に入ることはないと言明したのです。

では、イエス様は、何を求められているのでしょうか？予言、悪霊を追い出すこと、良き業、神への献げもの、祈り、聖書の勉強、律法を守ること、そして伝道活動。これらのすべてがイエス様の願いでないとするならば、わたしたちは、ほかに何ができるというのでしょうか？この聖句に出てくる人々は、「霊的」であるということに関しては、エリート中のエリートなのです。その彼らの実が主に受け入れられないのであれば、どのような実であれば、受け入れられるのでしょうか？この質問への答えは、すでにお分かりだと思いますので、質問する必要はないと思います。繰り返しは、重要な内容を覚えるため、そして何が重要かを見極めるのに良い方法なので、もう一度、質問しましょう。一体、主のわたしたちへの御心は何なのでしょう？「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです。」(ヨハネの第一の手紙第3章23節)つまり、イエス・キリストは、あなたが偉大なクリスチャンとなることなどには、関心はないのです。夢や、ゴール、ビジョンに成功するか、失敗するかは、イエス様の関心事ではありません。イエス・キリストにとって唯一の関心事、それは、あなたの心です。イエス・キリストを信じるすべての者が救われ、互いに愛し合う中で実を結んでほしい、そう願われているのです。イエス様は、クリスチャンが、身近にいる人たちを中心に愛することを願われています。つまり、教会で同じ座席に座ってい

る人です。そうです、イエス様は、貧しい人々に食べ物を与えたり、まだ救われていない人々に福音を伝えるよりも、わたしたちが教会で隣に座っている人を愛し、また、愛されてほしいと願っておられるのです。個人的にわたしは、このことを悟ったときに、ショックを感じました。ですが、これはこの世で最も明確にされるべきメッセージなのです。新約聖書に、イエス・キリストのしもべは互いに愛し合い、心を配り合い、そして助け合うようにと繰り返し書かれているからです（ルカによる福音書第22章24節から26節、ヨハネによる福音書第13章13節から17節、34節から35節）。

ここで、イエス様のたとえ話で、最もよく知られているものの一つを見てみましょう。マタイによる福音書第25章31節から46章です。このたとえ話は、イエス・キリストの思いをととも明確に映し出していると思います。信者にとって美しいことは、イエス様がわたしたちの心の内に住まわれ、このたとえ話の登場人物である良き人の実を結んでくださるということです。

マタイによる福音書第25章31節から46節は、長い聖書箇所ですが、皆さまに読んでいただけるよう、ここに引用いたします。このたとえ話は、多くの人に知られていますので、さらっと読まれるかもしれませんが、それでもいいのですが、できれば31節から32節、37節、40節、44節から45節は、特に注意深く読んでいただきたいと思います。

「31 さて、人の子が自分の栄光のうちに到来し、すべての聖なるみ使いたちが彼と共に到来するその時、彼は自分の栄光の座に着くだろう。32 すべての民族が彼の前に集められるだろう。そして彼は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように、彼らを互いにより分け、33 羊を自分の右に、やぎを自分の左に置くだろう。34 その時、王は自分の右にいる者たちにこう告げるだろう。『さあ、わたしの父に祝福された者たち、世の基礎が据えられて以来あなた方のために備えられていた王国を受け継ぎなさい。35 わたしが飢えたと食べ物を与え、わたしが渇くと飲み物を与え、よそから来ると宿を貸し、36 裸でいると服を着せ、病気でいると見舞い、ろうやにいと来てくれたからだ』。37 「その時、義人たちは彼に答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられるのを見て食物を差し上げたり、渇いておられるのを見て飲み物を差し上げましたか。38 いつわたしたちは、あなたがよそから来られたのを見て宿を貸し、裸でおられるのを見て服をお着せしましたか。39 いつわたしたちは、あなたが病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、あなたのところへ参りましたか』。40 「王は彼らにこう答えるだろう。『本当にはっきりとあなた方に告げる。これらわたしの最も小さい兄弟たちの一人にあなた方がしたことは、わたしにしたのだ』。41 それから、王はまた自分の左にいる者たちにこう言うだろう。『のろわれた者たちよ、わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために備えられた永遠の火に入りなさい。42 わたしが飢えても食べ物を与えず、わたしが渇いても飲み物を与えず、43 よそから来ても宿を貸さず、裸でいても服を着せず、病気でいたり、ろうやにいても見舞ってくれなかったからだ』。44 「その時、彼らも答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられたり、渇いておられたり、よそから来られたり、裸でおられたり、病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、お世話をしませんでしたか』。45 「その時、彼は彼らに答えてこう言うだろう。『本当にはっきりとあなた方に告げる。これらわたしの最も小さい兄弟たちの一人にあなた方がしなかったことは、わたしにしなかったのだ』。46 これらの者は永遠の処罰に入り、義人たちは永遠の命に入るだろう」

もう一度お尋ねします。主の御心は何でしょう？多くの人は、何時間も思案し、主の御心を見極める

ために長い時間を祈りに費やします。これをすべきだろうか、あれをすべきだろうか？右へ行くべきか、左へ行くべきか？もしかすると、主の御心はわたしがもっと祈ることかもしれない。聖書を多く読むことだろうか。聖歌隊や小グループへの参加だろうか。それとも、祈り、待ち、そして主より特別な油注ぎを受けることをかもしれない。献金を増やすことだろうか。もしくは、主の御心はわたしの献身かもしれない。伝道活動への参加だろうか。もっと人を愛することだろうか。このように思案します。ですが、驚くべき真実は、主の御心はこれらのどれでもないのです。では、主は一体どうお考えなのでしょう？主がこの世の王として、審判として戻られるときの主の基準は一体何なのでしょう（31 節から 32 節）？主は 40 節に、彼の御心は何か、はっきりと語られています。「王は彼らにこう答えるだろう。『本当にはっきりとあなた方に告げる。これらわたしの最も小さい兄弟たちの一人にあなた方がしたことは、わたしにしたのだ。』」イエス様の思いは、もっぱら最も小さい兄弟に向いているのです。イエス様の最も小さい兄弟とは、すなわち教会の中にいる弱さを覚える人たちのことです。イエス様のことを信じているけれども、力がなく、貧しく、途方に暮れ、着るものがなく、また、病気を患い、見捨てられている人たちを指しているのです（35 節から 36 節）。これらの聖句を注意深く読んでみてください。裁きの基準となるものは、ほかに何も書かれていないことにお気づきになることでしょう。イエス様はただ、わたしたちが最も小さい兄弟たちを愛しているかとお尋ねなのです。この見解の証拠に、もう一つ聖句を見てみたいと思います。ルカによる福音書第 9 章 46 節から 48 節では、こう語られています。「彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いかという論争が生じた。イエスは彼らの心の思いに気づき、幼子を連れて来て、自分のわきに立たせて、彼らに言った、「わたしの名のゆえにこのような幼子の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのだ。わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのだ。あなた方全員のうちで最も小さい者こそ偉いなのだ。」イエス様の目には、兄弟の中で最も小さい者を受け入れる人が、最も偉大なのです。

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」イエス様は、互いに愛し合うことを望まれています。イエス様の兄弟の中で、最も小さい者よりも愛と慈しみを必要としている人はいるのでしょうか？使徒パウロが「美しい部分はそうする必要がない。神は劣っている部分をいっそう見よくして、からだに調和をお与えになったのである。それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互にいたわり合うためなのである。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」（コリント人への手紙一第 14 章 24 節から 27 節）と語るのは、まさにこのことなのです。イエス・キリストの体であるわたしたちは、互いに愛し合い、とくにその体の中で強い者は、弱い者に心を配らなくてはなりません（ローマ人への手紙第 15 章 1 節、ガラテヤ人への手紙第 6 章 2 節）。イエス様の思いは全面的に、クリスチャンがほかのクリスチャンを愛することにあります。わたしたちがイエス様にあって一つとなるのが彼の思いであります（ヨハネによる福音書第 17 章 21 節）。クリスチャン同士が愛し合えないとすれば、明らかにほかのだれも愛することはできないのです。わたしたちに最も近い人を愛せないのであれば、遠くにいる人を愛することができるのでしょうか？今、この場所にこれほどの痛みがあるとき、どのように世界伝道について考え始めることができるのでしょうか？まず、体がいやされますように、そうすれば、ほかのすべてのことは自然と

ついて来るでしょう。イエス様ご自身がヨハネの福音書第 17 章 9 節でこう語られています。「わたしは彼らのためにお願いします。わたしは世のためにはなく、わたしに与えてくださった者たちのためにお願いするのです。彼らはあなたのもものだからです。」つまり、イエス様の願いは、彼ご自身の人々に向いているのです。イエス様は、信じない者よりも、信じる者に特別な思いをい দিয়েおられます。イエス様は、偉大な者より小さい者を、より特別に思っ ていらっ しゃるのです。強いクリスチャンより、弱いクリスチャンのことをより特別だと言われます。クリスチャンの務めは、キリストの体の完成化なのです。もし、わたしたちの中に強い者があれば、弱い者に心を配らせましょう。

よく知られるもう一つの聖句で、イエス様はこう語られました。「わたしがあなた方を愛したとおりに、あなた方だれかがその友人たちのために自分の命を捨てること、これより大きな愛はない。」(ヨハネによる福音書第 15 章 12 節から 13 節) だれかのために自分の命を捨てるには、よほどの理由がなければなりません。つまり、生死の境となるような場合以外、他人のために命を捨てたりはしないものです。必要は、必要を覚えているクリスチャンに見るものです。そのようなクリスチャンが、今ここに存在します。教会の座席に座っているかもしれません。または、家族の中にいるかもしれません。イエス様は、友のために命を捨てるようにと言われます。友とは、見知らぬ人、会ったことのない人たちではなく、むしろ、身近にいる人のことなのです。私たちはこのことを本当に悟らなければなりません。救い主であるお方について、さらに深く知っていくとき、やっ とこのことを悟ることができます。わたしたちの救い主は、個々に約束を下さっています。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」(ヨハネによる福音書第 6 章 47 節) わたしたちのために命を捨ててくださったお方、そのお方についてさらに深く知っていくとき、自然とその愛に成長させていただくのです。友のためにすべてを投げ捨てることをいとわない愛に、自然と育っていくのです。これは、わたしたちが確信していることでもあります。なぜなら、イエス様が永遠の命をくださった時点で、そう約束してくださったのですから。

マタイの福音書第 25 章 31 節から 46 節のたとえ話が興味深い点は、この話に出てくる義人たちは、自分たちが義人であると気づいていない一般の人々であるということです。「その時、義人たちは彼に答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられるのを見て食物を差し上げたり、渇いておられるのを見て飲み物を差し上げましたか』いつわたしたちは、あなたがよそから来られたのを見て宿を貸し、裸でおられるのを見て服をお着せしましたか。いつわたしたちは、あなたが病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、あなたのところに参りましたか。』」彼らの良き行いは、自然に生まれ出たものでありました。大きな計画や夢を抱いたわけではありません。ただ正しいことを行っ たのです。その行いとは、身近な人たちを愛したということです。もう一度言わせてください。強くあると思える方は、教会に座っている回りの方々を見回してください。必要を覚えている人を見つけるにちがありません。弱い人、もしくは、苦しんでいる人を見つけることでしょう。もしかしたら、信仰について悩み、励ましを必要としている人がいるかもしれません。ただ友達を必要としている人、または、お金や助けを必要としている人がいるかもしれません(そして、更に深い真実とは、読者の皆さまの多くが、助けを必要としているかもしれないということでしょう。救い主、主イエス様が、慈しみに満ちた偉大な心でわたしたちをかえり見て下さり、助けを送ってくださりますように、心から祈っています)。

その一方、義人たちが自分の義に気づいていなかったように、不義である者たちも、自分たちの不義

に気づいてはいませんでした。不義な者たちは、44 節でイエス様にこう答えています。「その時、彼らも答えてこう言うだろう。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えておられたり、渴いておられたり、よそから来られたり、裸でおられたり、病気をなさったり、ろうやにおられるのを見て、お世話をしませんでしたか。』」つまり、彼らは、間違っただけをしているとはどうも思っていない様子です。不義な者の共通点は、イエス様の最も小さな兄弟たちには何の関心も示さなかったことです。彼らがどれだけ素晴らしい生き方をしたか、何を達成したかは、重要ではありません。イエス様の基準は、明白ではっきりとしています。「あなたは、わたしのもっとも小さな兄弟たちに何をしましたか？」

本章の終りにあたり、もう一度、神のクリスチャンへの目的が何かを見てみたいと思います。「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです。」(ヨハネの第一の手紙第 3 章 23 節) 神がわたしたちに願われるのは、これに限ります。そして、これがすべてに優るのです。そうです、神のわたしたち、教会へのこの願いは、ほかの目的、夢、ビジョンがどれだけ偉大で素晴らしくあろうと、そのどれにも優るのです。イエス様を信じましょう。そうすればあなたは完全となるのです。イエス様を信じれば、あなたは、愛の実を生みだします。神のイエス・キリストにあるわたしたちへの目的は、想像を遥かに超えて大きく、素晴らしいのです。多くの人々は、「ただ信じ、愛し合う」だけでは、ものたりなく、愚かであると思われるかもしれません。ですが、これがイエス様の思いなのです。より優れた方法、ビジョン、夢、ほかの多くのことを求める人々に囲まれているが、イエス様の思いを妥協することのないようにしましょう。イエス様の福音は単純なのです。「本当にはっきりとあなた方に告げる。わたしを信じる者は永遠の命を持っている」(ヨハネによる福音書第 6 章 47 節) そして、彼の思いは単純です。「あなた方が互いに対して愛を抱けば、これによってすべての人は、あなた方がわたしの弟子だということを知るだろう」(ヨハネによる福音書第 13 章 35 節) 前章で、クリスチャンの生き方は、ヨハネの第一の手紙第 3 章 23 節の一文にまとまるということを見てきました。「これがその方のおきてです。すなわち、わたしたちがその方のみ子イエス・キリストの名を信じ、彼がわたしたちに命じられたとおりに、互いに愛し合うべきことです」。このことを悟るとき、肩の重荷が落ちていくような感覚を味わいます。神の掟は耐え難いものではなく、担うのに軽く、そして良きものと安らぎに満ちています(マタイによる福音書第 11 章 28 節から 30 節、ヨハネの第一の手紙第 5 章 3 節)。イエス・キリストを信じる方々がこのことを知れば、救い主であるお方への実を結ぶ生き方が、はっきりと見えてくるでしょう。